

# 深層日本帰行

ヤポネシア史観の形成へ

奥野健男

# 深層日本帰行

ヤポネシア史觀の形成へ

健男

消 印

毎日新聞社



## 奥野 健男 (おくの たけお)

1926年(大正15) 東京に生まれる。東京工業大学化学科卒。専攻、高分子化学。文芸評論家。東芝中央研究所員を経て現在、多摩美術大学教授。1952年(昭和27)『大岡山文学』に太宰治論を発表。1954年(昭和29)6月、日野啓三、服部達らと『現代評論』を創刊。1958年(昭和33)12月、吉本隆明、井上光晴、清岡卓行、武井昭夫らと『現代批評』を創刊。

〔主な著書〕『太宰治』『坂口安吾』『島尾敏雄』『現代作家論』『文学的制覇』『文学は可能か』『現代文学風土記』『日本文学史』『文学における原風景』。

## 深層日本帰行——ヤポネシア史観の形成へ 定価 980 円

1978年10月10日 印刷

Printed in Japan

1978年10月20日 発行

著者 奥野健男  
編集人 高杉治男  
発行人 高原富保  
発行所 毎日新聞社

☎100 東京都千代田区一ツ橋  
☎530 大阪市北区堂島  
☎802 北九州市小倉北区紺屋町  
☎450 名古屋市中村区名駅

印刷・中央精版／製本・大口製本

0095-500515-7904

© T. OKUNO 1978

深層日本帰行

目次

## I 深層日本の宝庫・東北

- 津軽幻想紀行 太宰治と縄文文化 7  
奇書『東日流外三郡誌』 36

## II 日本人の自然観と他界観

- ふたつの自然 43  
“死者たちの住む国”の復活 70

## III 日本文化の流源

- 坂口安吾の古代史観と縄文文化論 101  
古代の日本と朝鮮 119  
日本的なもの、朝鮮的なもの 韓国紀行 127  
ヤポネシアの根っこで 奄美琉球紀行 139  
タイ山地民族の村 江上波夫氏との調査行 145

IV 自己史をたどる

父の血と母の血 わが家の百年 153

ふるさとへの旅 熊野紀行 167

私の親父 175

私の読書遍歴 202

V 中国紀行

本家・故郷としての中国 217

ふたつの涙 240

中国の親しさと不思議さ 243

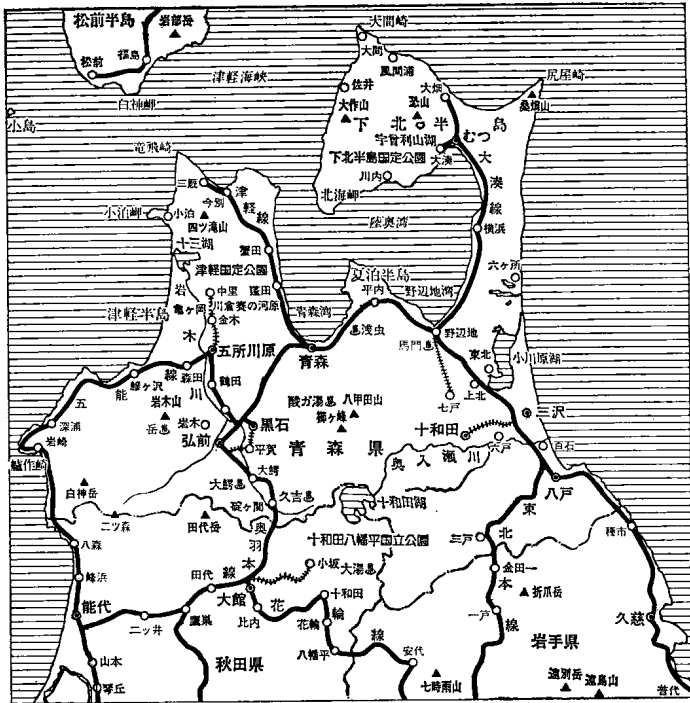
あとがき 248

初出誌一覧 253

装幀 中野佳子  
題字 磯辺泰子

I  
深層日本の宝庫・東北





## 津軽幻想紀行 太宰治と縄文文化

津軽は、いつからか、ぼくにとつて幻想の原風景になってしまった。ぼくは夢の中で、遮光器土偶などと呼ばれる奇怪な容相の亀ヶ岡の縄文土偶を祀っている情景を見ることがある。百千の船が輻輳し、千万の家が軒をつらねている十三湖のにぎわいを空想することがある。川倉の賽の河原はじめ、津軽各地に祀られている地藏の背後に、多くの飢饉や苦難を超えて縄文の土偶の面影が浮んでくる。髪振り乱す巫女の中に、腹を頭にはわせ神がかりした縄文のシャーマンの姿が重なってくる。そのイメージは眉太く、眼大きく、鼻高い津軽女、尻絵やねぶた絵に赤や青や黄の原色で描かれた女性の面影がオーバー・ラップしてくる。

ぼくはなぜこれほどまで津軽にとりつかれてしまったのであろうか。そのきっかけはいうまでもなく太宰治である。太宰治の文学に夢中になり、その論を書くようになるまでは、ぼくは津軽の名さえさだかには知らなかった。行ったことも、通ったこともなく、無論、知人や友人とてなく関心の外にあった。青森県は本州の北端にあり、下北半島と津軽半島とが北に張り出し、青函連絡船が通り、林檎が名産であるくらいの知識しかなかった。

何しろ太宰治自身『津軽』の中で、次のように自嘲的に述べている。

「津軽の歴史は、あまり人に知られてゐない。陸奥も青森縣も津軽と同じものだと思つてゐる人さへあるやうである。無理もない事で、私たちの学校で習つた日本歴史の教科書には、津軽といふ名詞が、たつた一箇所に、ちらと出てゐるだけであつた。すなはち、阿倍比羅夫あべのひらふの蝦夷討伐えまいのところ、「孝徳天皇が崩ぜられて、齋明天皇がお立ちになるや、中大兄皇子は、引続き皇太子として政をお輔すけけになり、阿倍比羅夫をして、今の秋田・津軽の地方を平げしめられた」といふやうな文章があつて、津軽の名前も出て来るが、本当にもう、それつきり、小学校の教科書にも、また中学校の教科書にも、高等学校の講義にも、その比羅夫のところの他には津軽なんて名前は出て来ない。」

東京に生れ育つたぼくが青森県イコール津軽と考え、林檎のイメージしかなかったのは、当然であろう。ほんとうに津軽、いや東北は学校で習つた日本の歴史には殆んど出てこない。天皇制中心の中央集権の歴史からは圏外の、完全に除外された地方であつたのである。今はそれ故に、津軽そしてみちのくの歴史こそ、天皇中心の倭わの勢力のみを記した日本歴史に対立する深層日本、原日本の歴史として、ぼくの幻想を誘うのだが。

しかし太宰治の文学に関心を抱いたからといって、それがただちに彼の故郷である津軽への関心に結びつくとはかぎらない。ぼくの場合、太宰治論を書きながらも津軽について考えることは余りなかつた。太宰の故郷を、日本の一般的な片田舎と意識するだけであつた。それよりも太宰治という文学者の内面、その不安や苦悩や宿命について考えるのに夢中だつたのだ。そして太宰

治の文学はその風土性、ローカル性を強調するより、現代人、いや人間の普遍的、永遠的な心情をその文学のモチーフにしていたから、ぼくは太宰治論を書くにあたって、津軽へ行ってみたいとは余り思わなかった。それは後年、室生犀星論を書くころとしたとき、是非ともその故郷である金沢を訪ねねば、その原風景はわからないと考えたのとは対照的である。それは犀星が「帰るところにあるまじや」と故郷である北陸の金沢を嫌いながらも、加賀百万石の伝統美意識や生活感情を自然に体現し、文学化したのに対し、太宰治は津軽を愛し、身びいきしながらも、中央から文化はつる辺境の蝦夷えぞの地と見られていることを強く意識し、田舎者と見られたくないと、なるべく津軽的な郷土色を出すまい、できるだけハイカラに、都会的に、いや国際的にならうとしたためである。

明治以来の日本文学を通観すると、今日にいたるまで、西洋文学の摂取に熱心で、東京を中心とする日本の文化を超え、西洋文化に直接取り組み、もっとも新しい西洋文学の影響を受けた作品や評論を書くのは殆んど地方出身の文学者であり、東京とか大阪、京都など中央文化の伝統のある大都市に生れ育った文学者は、意外に保守的で伝統的である。大都会出身の文学者が無意識のうちに、その伝統的文化の雰囲気きんぎに自足するのに対し、地方出身の文学者は、田舎者であることを意識し、東京や京都にコンプレックスを抱き、それを超えた世界の本場へ、最先端の文学にとびつき、日本の中央文化の事大性を見返してやろうという意識を持つように思われる。太宰治にもそういう一面があった。それ故に、都会育ちの学習院出の志賀直哉しがなおに反撥し、「如是我聞」で「お山の大将」とののしり、逆に東京生れの学習院出の三島由紀夫から、「田舎者のハイカラ

ぶりが鼻持ちならない」とののしられるのである。

しかし、それらは表面的なことに過ぎない。いかに津軽を田舎と卑下しようとも、太宰治の文学には、その底に津軽人の血が流れている。日本の歴史から蝦夷の地とおとしめられていた津軽の反骨の叫びがある。太宰治の中に津軽が骨がらみになってある故の、脱津軽であり、普遍的人間、最先端の現代文学への希求であるのだ。

そういうことに気がついたのは、「大岡山文学」に発表した「太宰治論」を書いてから、大分経つてのことである。太宰治の文学は「斜陽」「人間失格」がドナルド・キーンにより、「ヴィヨンの妻」などの短編がサイデンステッカーにより訳され、欧米に紹介されると、世界の各地の読者から大きな反応があった。日本にもこのような現代人の悩みを書いた文学者がいたのか、それまで谷崎潤一郎や川端康成などの文学は東洋へのエキゾチズムの興味から読んできたが、太宰治はそうではない。まるで自分の悩みを代弁してくれているようで、太宰治が日本人であることなど忘れてしまうと。こういう世界に共通する現代人のもっとも深い魂を、日本の中で太宰治だけが表現することができた。それはなぜかと考えて行くと、太宰治が津軽人であったということにぶつからざるを得ない。つまり太宰治は日本の中の異人<sup>エトランジェ</sup>であったのだ。日本つまり倭人の中央集権の国家の中の外人であった。蝦夷という庄迫され、差別されながら、なおも誇り高く、ついに一度も侵略されたことのない蝦夷の深部、根拠である津軽人であるが故に、倭——大和を中心とする世界の中でみると特殊な——つまり歪みながら洗練された文化に対し、外国人の目を持っていたのだ。いかに大和の文化にコンプレックスを抱いていたとしても、井伏鱒二<sup>いぶせますじ</sup>が、太宰治は

津軽弁で書くときは、たとえば「雀つ子」のように、完全な詩人であった。しかし標準語で書くときは、散文家、完全な小説家になったと評している。まさに至言である。津軽弁そのものは、京言葉と比較すれば、まさに外国語と断言していいほど異なる。その津軽弁の中では、太宰は意識しない自在の詩人であった。しかし学校で習う標準語、小説の標準語、それはラジオ、テレビのなかった時代では、まさに外国語であったのだ。太宰治は小説を書く過程において、外国語を習うような批評意識が、日本語つまり標準語に対して、言葉の魔術師とも言える意識した名人芸的な言葉——日本語に対する天才を育てた。と同時に、いわゆる日本人、中央集権化の日本人を客観化し、そこに埋没しない批評的で普遍的な自我を育てあげたのである。それ故に、あの日本がナシヨナリズムに傾いた特異な時代にコンプレックスを抱きながらも、客観視する普遍的な人間像を成立させ得たのではないか。

そういうことに気がついた時、ぼくははじめて太宰治の中での辺境蝦夷の地、津軽の大きさに気づき、津軽を知りたいと切に思いはじめた。そう思いながら、戦後の経済事情は、今と違って、なかなか青森までの旅を容易にさせてはくれなかった。このことも、今日の読者には、理解の難しいことだろう。太宰治自身、静岡県島の三島より西へは、つまり中部日本、西日本へは、生涯行かずじまだった。彼は大阪も京都も名古屋も知らなかった。青森から目と鼻の先の北海道さえ知らなかったのだ。旅行どころの生活ではなかったこともあるが、日本の中の交流も今日のようになかったのだ。終戦後すぐに東京から北海道へ行くということは、今日、アメリカやヨーロッパへ行くよりも、もっと困難な旅であった。ぼく自身も敗戦後、大学時代、そして会社

の研究所勤務の十数年間、旅行らしい旅行をしたことがなかった。

ようやく念願の津軽へ旅行したのは、昭和三十八年の夏であった。「太宰治論」を書いてから十年後である。筑摩書房、審美社、東奥日報の共同主催で青森、弘前で、太宰治にちなむ講演会が催された。その講師のひとりとして、檀一雄、木山捷平両氏と共に、津軽行に加わることができたのである。会社をやめて、ようやく自由な身になった翌年のことである。檀、木山という二人の先輩が素晴しかった。そのためもあるが、この津軽行ほど、魅力的で、ぼくの人生観まで変えてしまった旅は、その後の外国旅行でもない。この旅行から、東京生れ東京育ちで、地方には無関心だったぼくの考えが変わった。地方といわれる田舎の風土が、いかに強烈で魅力的であるかを、はじめてこの身で知ったのである。そしてその後、ぼくは機会をみては津軽を訪れるようになったのである。

その風土が、ぼくの魂を最初にとらえた文学者太宰治の故郷、津軽であったということに宿命的なものをおぼえる。津軽こそ、ぼくが深層意識の中で探し求めていた魂の風土であった。

昭和三十八年の津軽への初旅は、日記をめくると七月三十一日、十九時四十分上野発「北斗」で出発している。木山さんと深夜まで食堂車で飲み、木山さんの天真爛漫な性格が食堂車のウェイトレスにまで自然に伝わるのであろうか、営業時間も延長してくれ、二時頃寝台車に帰る木山さんを、彼女らは「おじいちゃん、朝のお味噌汁とっといてあげるわ」と親しげに送ってくれた。東北への旅は国鉄まで人情にあふれていいなと、ぼくはしみじみと思ったものだ。さい

さがよかつた。翌朝、浅虫温泉着、太宰ゆかりの東奥館で昼寝、木山さんと水族館を見物し、夏泊半島なつどまりをモーターボートで一周した。その折のことは、木山捷平さんが、小説に軽妙に鋭い観察で描いている。檀さんは本州最北の津軽へくるのに、わざわざ九州の福岡ナンバーの車で、久留米の病院長、福岡の会社社長二人を運転手にして、半月の漂泊旅行のあげく、夕方ようやく浅虫にあらわれるや、たちまち裸になり浅虫湾で泳ぎはじめた。

その夜、青森市の図書館ホールで太宰治にちなむ講演会がひらかれた。木山さんは臍へその緒はを切つて以来、講演と名のつくものをやるのははじめてだった。飲まなくてはともやれるものじゃないと、屋台の飲み屋にもぐりこみ、檀さんはアルコールが入らないと、絶句して立往生するかも知れぬと、どこかのうどん屋にもぐりこむ。ぼくも急に不安になって、太宰研究家の相馬さんを誘い、一杯飲み屋にかけこむという始末で、開会してからも講師が行方不明で、編集長の開会の辞をえんえんと延ばすうち、ようやく木山さんが帰ってこられ、演壇に立ったが、とつとつと下駄げたの話を五分しゃべっただけで、これで終りと降壇された。しかし、その風格と語り口は聴衆を魅了した。ついで檀さんは、ビールを飲みながら立て板に水の早口で、太宰との交友を勢いよくしゃべられたが、これも二十分で突然絶句、「終り」と叫んで降壇される。そのため、ぼくは太宰治の思想などという固苦しい話をえんえん二時間もしゃべって穴をうめる羽目になった。浅虫の東奥館に帰って、新聞社の座談会、そして深夜までさかすま盃さかずきを重ねた一行は、翌朝マイクروبスで青森を過ぎ、太宰治の「魚服記」の舞台である梵珠山ぼんじゆざんのおだやかな丘陵を右に眺めながら、太宰の恩人である中畑さんの住む、いや太宰が幼年時代、実の母と思ひ込んでいた、叔母きゑの住ん



でいた五所川原に着く。いよいよ太宰文学の舞台に入り込んで行くという緊張に胸がたかなる。

五所川原から真北へ、金木への一本道は、その頃は舗装されてなく、マイクロバスは木の葉のように揺れた。しかし目路の限りひらかれている津軽平野の新田地帯は、ところどころ林檎畑のある水田が続ぎ、明るく美しかった。特に目をひいたのは、街道筋の民家の茅葺屋根の美しさである。同じ青森県でも南部藩の民家は、牛や馬も同居する曲り屋づくりが多く、茅葺屋根もかたちは歪んで、頂上にはペンペン草が生えている原始的、自然的な趣きだが、津軽の民家は切妻の直屋づくりで、その屋根の萱や藁は神経質と思えるほど鋭角的に切りそろえてあり、屋根のテッペンには、さまざまな意匠を凝らした煙出しがとりつけられてあり、いかにも清潔だ。ぼくも車の窓から次々にあらわれる民家の美しさ、しかし昔ながらの兩戸が少しでも明るくと硝子戸に替えたのであろうか、冬はいかにも寒そうに見える貧弱で汚れた硝子戸の哀しさに気を奪われていた。

誰かが小さい川を指さし、これが嘉瀬と金木の間の小川だという。「嘉瀬と金木の間の川コ、小石コ流れて、木の葉コ沈む」と津軽奴踊りに唄われている。当時の役人や地主らの農民に対する理不尽な苛斂誅求ぶりを、沈むはずの小石が流れ、流れるはずの木の葉が沈む、世の中はあべこべだということを、農民は唄うことで心の一端を表現したのだらうか。こういう発想や表現にもアネクドートで政治を諷刺したロシアや東欧の小国などの近さを、ぼくは津軽に感じるのだ。

やがて一望の水田がひろがる津軽平野の涯に、はるか金木の町が見えてくる。小高い丘の金木